

第Ⅲ部

若い教師の集い・新人教師の奮闘記

Zoomによる第5回「法政大学若い教師の集い」と 「新人教師の奮闘記」掲載について

法政大学教職課程センター市ヶ谷相談指導員 戸塚 吉彦

1 「法政大学若い教師の集い」開催の経緯

「法政大学若い教師の集い」は4年前に始まりました。当時、第1回目の開催に向け、3キャンパス共通メールで発信されたメールには、“法政大学教職課程センターより、卒業生の皆さんにお呼びかけです。

法政大学に教職課程センターが出来て5年が経ち、現在沢山の卒業生が教職に就いております。この度、この5年間に法政大学を卒業されて教職に就いた方々を対象に、初めての企画として「法政大学若い教師の集い」を行います。若い教師の皆さんで集まり、大学時代の思い出や今の仕事のやりがいや悩みなど、ざっくばらんに交流したいと思っております。”とあります。それまで法政大学にはなかった、教育現場で頑張っている卒業生の皆さんの横の繋がりを創りたいという趣旨で始まったのがこの集いです。

第3回の一昨年度から、教職課程センター運営委員会における検討を経て、市ヶ谷教職課程センターが中心となり呼びかけと運営をすることになりました。2019年8月23日（金）の夕方、市ヶ谷キャンパスの教職課程実習室を会場に第3回「法政大学若い教師の集い」開催することができました。しかし、残念ながら、昨年度の第4回「法政大学若い教師の集い」は教職課程センター運営委員会において、感染症対策により「ざっくばらんに交流」することはとても難しいと判断し、「中止」が決定されました。

昨年度の中止を受けた今年度、感染症に対する対策や「密」をできるだけ作らないようにすべきという配慮から、今年度も対面での実施は見送りました。しかし、2年続けての中止では「法政大学若い教師の集い」開始の際の趣旨が薄れてしまうと考え、Zoomによるオンラインでの試行開催となりました。

2 Zoomによる「第5回 法政大学若い教師の集い」当日の様子

試行開催へ向け、市ヶ谷キャンパスの卒業生へ向けに発信したメールには、“本学出身の若い教師の皆さんで集まり今の仕事のやりがいや悩みなど、ざっくばらんに交流する会を実施しています。昨年度は感染症対

策で開催を中止しました。

今年度は対面での実施を中止しますが、試行として「Zoomで若い教師の集い」の開催を計画しております。懐かしいメンバーとの再会、法政卒業生同士の新たな出会いの機会に、ぜひご参加ください。また、該当する卒業生で、このお知らせが届いていない友人知人がいらしたら、この呼びかけを転送いただけたら大変ありがたいです。よろしくお祈りします。

詳細は下記となります。

◆ 日時：2021年8月21日(土) 18:00～19:30

◆ 会場：自宅等、密にならない場所からご参加ください

※お手元にアルコール又はソフトドリンクをご用意ください（くれぐれも酔っ払いにならないようお願いします。）”

というものでした。

当日はバンコクの日本人学校で働く卒業生も含め、10名の卒業生に参加していただきました。もちろん、皆さんの手元にはアルコールが用意されており、画面越しで乾杯をしました。会の趣旨説明や自己紹介をした後、Zoomのブレイクアウトセッション機能を使い、参加者を2つのグループに分けて「ざっくばらんに交流」を展開しました。各グループの主な話し合いの内容は以下のとおりです。

チーム1

① テーマ [悩みや困っていること]

Nさん：「部活動や委員会活動の進め方が分からない。でも、先輩には少し聞きづらい…」

Mさん：「毎年活動はあるので、学校のパソコンのフォルダに前年度などのデータがあるはず。それを参考にするといいかも。」

「遠慮せず他の先生にどんどん聞くのが一番良い。きっと教えてくれる。どんな温度感で進めているのか、なども知ることも大切。」

Moさん：「年間を通しての見通しを持つことで、進めやすくなる。」「先輩にぐいぐい聞こう！」

Eさん：「私も今年度部活の顧問になり、分からないことだらけなので、生徒にも聞きながら進めている。分かっているフリはせず、生徒を頼ることもいいと思

った。」

② テーマ [授業での ICT 活用]

O さん：「タブレット導入が進んでいるが、具体的にどのように ICT を活用していくのがよいのか。授業で使うと、生徒の視線がタブレットに向いてしまうような…」

M さん：「定時制はまだ一人一台タブレットは導入されていない状況。しかも、コロナで 30 分授業に。英語科なので YouTube で動画を流したりすることは時々行っている。」

O さん：「先生によってタブレットに対する考え方もそれぞれですね。」

N さん：「自分の学校では全員タブレットを持っているが、教員の分はないので、あまり触れられていない状況。授業では、調べ学習で使用したり、参考になる画像を写したりしている。」

「他の先生は、Google アンケートを使って、クラスの決めごとをしたり、理科の先生はデジタル教科書を使ったりしている。」

E さん：「2 学期に実践したいと考えているのは、本の紹介をする授業の時に、タブレットを使って、ポップを作成し、それをもとに本を紹介する活動。また、夏休み中、部活動の連絡で使っている先生が多い。」

③ テーマ [その他]

M さん：「みなさんにお聞きしたい。学校の先生の労働環境は、よくブラックだと言われるが、そんな中、どうして教員になったのですか？」

O さん：「私は今、副担任ということもあり、割とゆとりがある。小学生の頃から学校の先生になりたいと思っていた。大学で授業研究を何度かして面白いと感じ、本格的に目指すようになった。また、大学時代に定時制の高校でボランティアをし、やりがいを感じた。」

N さん：「ノート採点や、定期テスト作成で残業が増え始めている現状。中学校の教員をやりたいとはずっと思っていた。一般企業のインターンも行ったが、大人相手の仕事だと癒しが無いと思った。」

E さん：「大学時代に経験したボランティアで、生徒を応援することのやりがいを感じ、教師としてもっと多くの生徒の力になりたいと強く感じた。」

M さん：「民間を経験したが、自分的に民間の方がきつと感じた。定時制の学校は負担が少ないのかもしれない。生徒を見ていると、常に未来志向で良いな、と思う。」

Mo さん：「昔は、採用試験の倍率が 30 倍もあり、あきらめた。だけど、大学の時、教授が学生から慕われているのを見て、良い仕事だなと思った。そしてそ

の頃、倍率が下がっていた小学校の採用を受けた。教師一年目は夏休みすら取れないくらい忙しかった。今は、17:30 には帰れている。」

チーム 2

テーマ：[悩みや困っていること]

Q. 保護者対応、どうすればいいのか

→・保護者会なら、生徒の様子を共有する

Q. 授業改善、どうすれば？

- ・ほかの先生からのアドバイスを受けることが大切。
- ・オンライン：一方的な動画配信になってしまっている。
- ・正解にたどり着かせ、自信を持たせる授業内容を。
- ・生徒が興味を持つような内容を。

Q. 英単語の意味が分からない生徒への指導

→・身近な歌や漫画で使われているものを紹介する。英語の歌、ゲームを用いる。

- ・文法を教える場合…教科書の例文よりも、シンプルな別の例文を用いたほうが分かりやすい。

Q. タブレット導入時、正しい使い方ができていない(授業中に動画を見る)。どうすれば？

- ・学校として制限をかけても抜け穴がある。

Q. グーグル翻訳を使ってしまう。勉強として認めていいのかわからない。

3 「新人教師の奮闘記」掲載の経緯

昨年度の 5 名の「新人教師の奮闘記」を読ませていただくと、「先が見通せない」状況下でも、先輩教員からの指導を受けながら、一生懸命に奮闘している姿が伝わってきました。そこで、「新人教師の奮闘記」の掲載を運営委員会に提案し了承をいただき、今年度も掲載することにしました。

4 まとめ

今年度は、Zoom による「第 5 回 法政大学若い教師の集い」の当日の様子が伝わるよう、できるだけ再現してみました。如何でしたでしょうか。新人教師が様々な悩みや不安を率直に吐露し、先輩教師がそれに対して経験を基に的確なアドバイスをしている様子が見て取れれば幸いです。来年度の第 6 回は対面での実施か Zoom の形態か先の見通しはできませんが、皆さんの力をいただきながら育てていけたらと思います。

また、昨年度から始めた「新人教師の奮闘記」は、「法政大学若い教師の集い」の開催形態に関わらず、今後も継続した企画としていきたいと考えています。

まさに「光陰矢の如し」…！な教員 1 年目

H. O.

(東京都公立高校地理歴史科教員)

1 はじめに

2020 年度キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科卒業の O です。

私は現在、東京都公立高校の地理歴史科教員として勤めています。本校は、9 月末の緊急事態宣言解除まで、時差通学・40 分授業の特別時間割でした。ようやく通常の教員生活を迎えたタイミングで、毎日どのような日々を過ごしているのかをお伝えさせていただきます。これから教員になる方や、教職課程を履修している方々の一助となれば幸いです。

2 総合学科ってなに？

現在勤務している高校は、単位制の総合学科です。1 年次は、自分だけの時間割づくりや班別学習を通して、主体的・対話的で深い学びに向けた下地を作っていきます。2 年次以降は 6 つの系列に分かれ、ビジネス分野や語学コミュニケーション、情報システム、文化・芸術、そしていわゆる文系・理系と、自らの興味・関心を卒業時まで深めていくカリキュラムになっています。ということは…、教える側も生徒とともに幅広い教養（と教材研究）を備えておく必要があります。社会（地理歴史・公民科）といっても、比較文化、日本文化、地域研究、心理学基礎、国際問題、時事問題演習などの独自科目が開講されているため、いったいどんな授業を受け持つことになるのか、驚きを隠せませんでした。今年“初任者”の糞に隠れ、最小限の負担で抑えていただいておりますが、来年以降はより一層総合学科に染まっていくでしょう。

そして、6 系列の学びの延長線にあるのが、課題研究です。近年多くの都立高校でも導入されている、卒業論文作成とその発表を行う授業です。11 月頃は、2 年生がテーマや構想を決め、各教科の教員に相談をおこなっている時期になります。大量に押し寄せる生徒たちと対話を重ねてきましたが、やはり「将来、社会がどうなっていくのがよいか」、未来志向型の考え方で仮説検証をしていくのが難しいようです。しかしながら、主体的に学びを実践していく校風の中、生徒が悩みながらも生き生きと取り組む様子を、私もパワーをもらっています。

3 社会人 1 年目 ≠ 教員 1 年目

新米教員として乗り越えなければならない試練・第 1 波-がきたのは 6 月頃だったでしょうか。授業時数の都合で前期中間試験がなかったため、はじめての試験問題作成と成績処理。第 1 回研究授業も控える中、校務分掌では夏期補習のスケジュール調整・講座申し込みの窓口役と、業務が山積していたのを覚えています。特に校務分掌では、学年団や他教科の先生との慣れないやり取りが生じます。正直なところ、抱えている業務がひと段落するまでは、胃の痛い日々が続いておりました。学校は、企業人経験のある先生方も多いため、必ずしも教員 1 年目 = 社会人 1 年目とは見られません。「O 先生は落ち着いているから、複数校経験しているかと思った！」というありがたい声もいただきますが、その分、段取りよくこなせて当たり前と見られる場合もあります（あくまでも自意識の範囲で、ですが）。

そのような中で支えてくれたのは、やはり担当クラスの生徒たちです。特に世界史 B を履修している生徒たちは、時に私よりも深い知識や教養をもっており、恥ずかしながら授業では度々助けてもらった部分があります。「先生この絵画を知っていますか？」「こういう見方もできますよね」という声は、授業に厚みをもたらしてくれるとともに、対話で深める世界史授業の大切さを学べました。加えて先日、国語科の先生がある置物を見せたいと声をかけてくださいました。なんと、旅行の際中国で購入した汗血馬の置物。『山月記』の学習時に見せたところ、「見たことある！」「これ大久保先生の世界史でやったわ！」との声が挙がり、盛り上がったそうです。国語の授業で見た「汗血馬」の置物と、世界史の「前漢武帝の治世」。これは他教科の先生との情報交換があつてこそ、同じ学期中に授業内容がリンクする場面があつたと気づくことができました。

他教科の先生や生徒との交流があつてこそ、納得感のある授業が生まれるため、空きコマには授業見学やオンライン研修会等への参加で、授業実践集めを行っています。

4 さいごに

春から教員になる皆さんに、私から 2 つの助言をお送りします。1 つは、「教員はいつでも忙しい職業だからこそ、(先輩教員が忙しそうに見えても)すぐに声をかけること」です。様子を伺いながら、後にしよう後にしようと考えていると、あつという間に問題が山積していきます。困っているときは「教員 1 年目」の肩書をうまく使い、遠慮なく報・連・相（特に相）をしてください。2 つは、自分自身が 1 番その教科を楽しむ気持

ちを大切にしてください。教員 1 年目はその日の授業準備に追われ、1 日を過ごすのもやっとの思いです。教員が疲れているときは生徒のノリも悪くなる…そんな日もあります。逆もしかり。教員の熱意・探究する面白さは、話す素振りを通じて生徒へも伝染していきます！

まさに「光陰矢の如し」な教員生活ですが、ふとした時に初心の気持ちが支えになっています。10 月中旬、現在大学 4 年の後輩が教員採用試験の合格報告をしてくれました。ちょうど疲れが溜まっている時期だったのですが、それが吹き飛ばすほどの嬉しさでした。自治体や校種は違えど、同じ夢を追う教員仲間が増えることは大変嬉しいです。ぜひ一緒に、学校教育を支えていきましょう！

奮闘記

A. N.

(福岡市立中学校社会科教員)

1. はじめに

「新人教師の奮闘記」を書きます、と言ったものの何を書けばよいのか、頭を抱えてはや数か月。今回は、この数か月の間に起きたことの情報共有、という形で書いていこうと思う。私が勤めるこの中学校は、福岡市の中でも特に学力的に厳しく、生徒は素直で明るい子どもが多い半面、やんちゃな生徒も在籍している。日々を必死で生きていく中で起きた出来事と反省を本稿では紹介したい。

2. 次々と降りかかる仕事

改めて、私の仕事について紹介したい。学内の仕事としては、所属は 3 学年の 3 クラスの副担任であり、校務分掌は一つが清掃指導・環境整備の長（リーダー）、もう一つは情報教育を担っている。部活動は、女子ソフトテニス部の副顧問だと思っていたが、いつの間にか監督になっていた。授業は 1・3 年生の 5 クラスを担当している。学外の活動では、福岡市の社会科教育の研究員になったり、県のソフトテニスの選抜チームに技術アドバイザーとして入っていたりする。1 年目でこんなこともやらされるのか、と驚くことばかりではあるが、なんとか日々を過ごすことができているため、仕事の分量は多いが安心してほしい。

特に驚いた仕事としては、校務分掌における長の役割である。改めて書くが、私は大卒 1 年目の人間である。教員としての学校生活なんてものは全くわからな

いし、同じ分掌には私より経験年数のある先輩教員がいるのに、「なぜ私が…」と思ったのは言うまでもない。しかし、仕事内容はわからなくても、周囲の先輩教員とにかく仕事の進め方を聞きながらするしかない。与えられた仕事をまずはこなすことを第一に頑張ることが大切だと思う。

3. 生徒指導のオンパレード

例えば昼休み。学年の先生から「〇組の〇〇、△組の△△、□□がいません。」と連絡が入って捜索に行く。放課後、近隣住民からタバコを吸い、お酒を飲んでいたり通報があったり、スケボーがうるさいからどうにかしてほしいと電話が入ったりする。SNS 関連のトラブルもたくさんあった。「チーム学校」なんて言葉はあるが、最終的な指導はどうしても学校で行われることが多くある。そこで私たちは何をすべきなのか、とても多くのことを考えさせられた。頭ごなしに叱ったところで、根本的な解決にはならない。なぜそのような行為に走ってしまったのか、原因は何か、子どもが抱える問題が別にあるのではないか、周囲の生徒に与える影響も考えて指導をしなければならないと感じた。

4. 定期テストは何のため？

生徒指導が忙しいとはいえ、私たちの仕事の大部分は教科指導であることに変わりない。教科指導が面白くない教員の生徒指導を、生徒は進んで聞き入れようとするだろうか。これは、私の指導教官の言葉だがその通りのように思う。生徒は、どうすれば「面白い」と感じてくれるのか、それを考えるにはまず生徒理解が必要であるし、それと同時に授業者としての自分の「面白い」と思う授業の在り方を確立しなければならない。

偶然であるが、指導教官が福岡市の社会科研究会の専門部長をしていることもあり、私も指導教官の管轄である歴史分野の研究員として活動をしている。ベテランの先生方の活動を見ながら、技術や知識を自分の糧にする。授業力を高めるためには、専門書だけでは足りない部分が多く、実際にたくさんの実践を行ってきた先生方の話を見たり聞いたりするほうが得られるものは多い。百聞は一見に如かず、という言葉があるように、1 年目は特に買ってでも苦勞をしたほうがいいのかもかもしれない。ほかの先生方との交流を通して教科指導の力を高めることをお勧めしたい。

また、教科指導を進めるうえで、最後に立ちはだかるのは定期テストである。過去の奮闘記の中にもテストづくりを話題に挙げていた先輩がいたが、本当にテストづくりは奥が深いと感じた。ワークや教科書の問題

を切り貼りするだけでは面白くない。かといって、好き勝手な問題を作れば生徒は混乱する。テストは生徒にとって学力定着の確認の場である一方で、教員も普段の授業がどれほど効果的であるかを確認する場である。テストを見れば、それまでどのような授業を行ってきたかがわかるような内容にしなければならないと指導教官からは助言をいただいた。

5. おわりに

ハイフレックス型の授業が浸透しだした中で始まった教員生活は混乱するばかりであった。目の前にいる生徒、画面の向こう側にいる生徒が同時に同じ授業を受けている、そんな私たちのあたりまえは塗り替えられているのだと痛感した。最後に、春から教員になる皆さんに僭越ながら助言したいと思う。それは、「やりがいにして生きがいにはするな」という考えだ。教員という仕事は、始めて数か月の人間が言うことではないかもしれないが、とても尊いものだと思う。子どもたちの目線は、自分にはない感覚で、もしくは忘れてしまっていた懐かしい感覚で、ともに時間を過ごしていき自身の感覚が研ぎ澄まされていった。子どもたちのために何か頑張りたい、と思う感情が自然と出てくる、そんな仕事であると思う。一方で、授業研究、事務作業に追われ、生活リズムは不規則になることも度々ある。身体が資本な仕事であるため、やりがいを生きがいにせず、健康第一で子どもたちとの尊い日々を過ごしてほしい。

生徒を振り向かせる授業のつくりかた

S. I.

(千葉県公立高校英語科教員)

1. はじめに

新型コロナウイルスの影響による全国一斉休校から1年以上が経過しました。昨年度とは違って、幸いにも4月から生徒たちと顔を合わせることでできた私ですが、緊急事態宣言の影響により9月から1ヶ月余り分散・時差登校が実施され、学校行事も中止・延期が相次ぐなど、生徒や教員の置かれる環境は今なお不安定です。このような状況ではありますが、新米教員として学ぶことはたくさんありました。そのうちの一つを、僭越ながら新人教師奮闘記として以下に述べたいと思います。教員を目指す皆さんに、少しでも参考になることがあれば幸いです。

2. 生徒が1番興味を持つことは？

教員の授業において、生徒が最も耳を傾ける場面とは一体どのようなものでしょうか。これについて考えたとき、少なくとも私の勤める学校においては、私の身の上話だったりします。時折授業内容と絡めて、あるいは雑談として私の(わずか20数年の)人生経験や他愛のない日々の出来事を語ったりするのですが、私が何時間もかけて考えた授業よりも、こういうパッと出てくる雑談の方が生徒の注目度が高いのです。私がふとした拍子で語り出すと、ノートを取る手を休めてまでこっちを向くのが面白いような、申し訳ないような...

これまで生徒を振り向かせる授業とは、上手に生徒の関心を引き、わかりやすく、かつ楽しく学ぶことのできるものばかりだと思っていましたし、その点では既に何年・何十年もの経験を積んでいらっしゃる先輩の先生方には敵うべくもありませんが、そんな私でも唯一いい勝負まで持って行けそうなのが、こういった雑談・体験談で生徒を振り向かせるテクニックです。では、このような生徒の注意を引きつける雑談のネタをどこから仕入れるか。また、仕入れたネタをどのように授業で活用するか...? 自分は次第にこのようなことを考えるようになりました。

3. 授業のつくり方について

ところで、教師は授業こそが本懐です。ならばと、教科書や参考書をひたすら読み込み、そのエッセンスを残らず生徒に伝えるのが私の役目だと、以前はそのように考えていました。しかし、その結果誕生した授業は、生徒どころか教壇に立つ私まで何だか退屈だと感じるものでした。全体的に私(教員)から生徒への一方通行なコミュニケーションが多く、生徒にとっても学んでいる内容と彼らの日常生活との結びつきが感じられずにいたようです。しかし、ふとした拍子に雑談を挟むことの絶大な効果を確かに感じ取った私は、教科書の代わりに、自分の日常で起こる出来事へより注意深く目を向けるようになりました。

当初は、生徒と雑談を交わすためのネタを仕入れる程度の認識でいました。授業の合間に休憩がてら、あるいは生徒の注目をここぞというときに引くために活用するのが目的です。しかし、日を追うごとにつれて、このような日常の些細な出来事から、驚くほどに授業のテーマや手法が浮かぶことに気づきました。ふとした会話やニュース、街中の広告や、生徒が教室で交わしている雑談、先生方が職員室で交わす何気ないやりとり、読んでいる小説や最近見た映画など、これらの出来事から授業の根幹を支える大きなテーマが浮かんできた

り、生徒がより身を乗り出して授業に臨むことのできるような授業形式を思いついたり、「教科書『を』学ぶ」授業をしていた自分が、徐々に「教科書『で』学ぶ」授業を行っているという手応えを感じるようになりました。また、徐々に生徒の反応も豊かになり、授業終わりに「～で英語を学びたい」「～をもっと知りたい」などの反応も寄せられるようになり、それを元にして私が授業を改善すると、更に生徒の反応も良くなる、といった好循環も生まれてきたのです。他クラスで行った授業の話聞きつけて、また別のクラスの生徒が「先生、今日うちのクラスで～をやるんですよね。すごく楽しみです」と言ってくれたときは、自分もそのクラスで授業を行うのがとても楽しみになってしまいました。自分が他愛もなく送る日常には、こんなにも授業を豊かにしてくれる素材があふれているのだと心底驚きました。

4. おわりに

教育界に足を踏み入れてまだ1年も満たない未熟な私ではありますが、以上に述べた内容を踏まえて、僭越ながらこれを読む皆さんへ1つアドバイスを差し上げたいと存じます。それは、皆さんの毎日の体験・経験をより大切にしたい、ということです。これは決してボランティアをしる、とか、毎朝新聞を欠かさず読め、とか、そういうことを要求するわけではありません（もちろん、経験を積み上でやってみるに越した事はありません）。自分の身に起こった小さな出来事を記憶に留めておいたり、知人や友人と交わす何気ない会話にふと注意を向けてみたりして欲しいのです。あなたの身の回りに起こるほんの些細な出来事が、もしかしたら数年後に授業の核となるほどの大きなテーマとなり、生徒が熱心に耳を傾けるような教訓を含んでいるのかもしれない。言い換えれば、教員にとっては、あるいは教員を目指す人々にとっては、日々送る毎日が、自己を研鑽するための研修のようなものなのです。そして、授業を行う時間が待ち遠しくなるような、そんなアイデアをたくさんストックしていきましょう。教員が授業を楽しまずして、生徒が授業を楽しむことはないのだと思います。

学校生活山あり谷あり

A. N.

(横浜市公立中学校社会科教員)

1 はじめに

私は2020年度に文学部史学科を卒業し、現在は横浜市の公立中学校に勤めています。

新任教師として赴任してからもうすぐ9ヶ月が経とうとしている中で感じたことを書きたいと思います。

2 大変な時期

私が4月に中学校に赴任して1番に思ったことは「え、いつ教材研究するの？」でした。教育実習の時は1週間猶予があり、しかもその間はそれ以外やることがなかったのが納得がいくまで準備を行えたものの、それでも実際は足りなかったと感じました。4月に赴任してすぐ会議や入学式、始業式といった行事や学年に関係するものの準備に追われ、気づいたら土日、明けたらもう授業となっていました。私は3年生所属だったので直接受験に関わってくるというプレッシャーもあり、もう1人の社会科の先生に助けをいただきながら4月を乗り越えました。

次に思ったことは、「テストってどうすればいいの？」でした。私の学校は二学期制なので、6月、9月、11月、2月にテストがあります。テストはワークの問題を切り貼りすればいい訳では無いので問題作成にかなりの時間がかかります。6月と9月はそれぞれ横浜開港記念日と夏休みがあったので比較的余裕をもってテストを作ることができましたが、11月は休みもなく、体育祭や部活動の定期演奏会とも時期が被ってしまったためとても忙しかったです。また、採点にも苦戦しました。採点基準を前もって決めておかないと後で大変なことになるよ、と教えていただいていたのですが、予想を超える答えが多くあり、その微調整がとても難しかったです。

次に思ったことは、「成績ってどうすればいいの？」でした。私は3年生に所属しているので9月の前期成績、11月の進路成績、3月の学年末成績があります。成績をつける時には必ず説明責任が伴います。なぜこの数値になっているのかを学年全員分一人一人確認をする作業を複数回行いました。3年生は受験に関わるものなのでとても緊張しましたが、学年の同じ教科の先生と協力して乗り越えることができました。

教員の仕事は授業だけではなくありません。私は吹奏楽部の顧問をしています。吹奏楽部は7月にコンクール

があり、そこで初めて朝練習を行いました。私はもともと早起きはとても苦手なので起きなければならない時間を見てとても不安になりました。生徒が朝早くから頑張ってきてくれるので自分も頑張らないと、と思い朝練習にもしっかり取り組むことができたと思います。

3 私にとっての支え

ここまで色々大変なことを書いてきましたが、この大変なことを支えてくれるものが私には2つあると思います。

1つ目は生徒たちです。私のやりがいは生徒たちがいること、に尽きると思います。どんなに疲れていても生徒の笑顔を見たら疲れを忘れられます。日々の生徒とのコミュニケーションがそのまま教員のやりがいに直結していると実感しています。生徒から授業が楽しいと言われたら嬉しいですし、「先生ー！」と手を振ってくれる生徒もたくさんいます。その生徒たちを見るとモチベーションが上がります。分散登校の時は一日おきにクラスの半分の生徒が登校してくるので、寂しさもありましたが登校してきたときに「先生！」と声をかけてくれることで生徒がいることの嬉しさを改めて感じました。さらに10月になって分散登校が終わり、全員揃ったときの感動がとても大きく、生徒はいるだけで私にパワーをくれているのだと感じました。

2つ目は趣味です。教員として働く中で、学校でたくさん刺激をもらうことができ、とても楽しいです。しかし、忙しい時期だったり、大変なことが重なったりして頭を冷やすためにも仕事から少し離れる必要があるときがあります。そういう時には趣味の時間を作って息抜きをしています。アイドルのDVDを見たり、猫と遊んだり、ゲームをしたり、本を読んだりとその時やりたいことをやるのが1番いいのだと最近気づきました。それをすることでまた明日からもがんばろうという気になります。大学生まで私は趣味は少ししかありませんでしたがその趣味をもってよかったと本当に思います。今は以前より趣味が増え、その時やりたいことをやる、が実践できているので4月の教員になりたての時よりも上手く時間を使えるようになってきています。なので、社会人になる前に1つでもいいので趣味をつくることをおすすめします。

4 おわりに

教員採用試験に受かると多くの人が「学生のうちに教材研究をしっかりしておきなさい」と言われると思います。私もそのうちの1人でした。当時の私は「教材研究って言われても教える学年も分野も分からない

のに...」と思い、簡単な問題集を解くくらいしか準備をしませんでした。しかし、教員になって初めて学生のうちにできる教材研究があることに気づきました。それは「日々の様々なことに疑問をもって調べること」です。授業をつくる時に私は必ず「生徒がどこに反応しようか、疑問をもちそうか」を考えます。それを考えるためにはまず自分が色々な視点から興味を持たないといけません。その習慣を大学生のうちにつけておくと教員になってから必ず役立つと思います。

私の今の目標は「N先生の授業がある日が楽しみ」といつてもらえるような先生になることです。そのためには一層教材研究に力をいれないといけないと思っています。これからも魅力ある授業をつくれる先生になれるように努力していきます。

教員生活1年目 in Thailand

A. H.

(タイ日本人学校英語科教員)

1. はじめに

2020年度グローバル教養学部卒業のA. H.です。現在、私は東南アジアにあるタイの日本人学校で英語科教員をしています。世界中にある在外教育施設の中でも、タイの日本人学校は最も歴史が古く大きな在外教育施設です。生徒数は小学部と中学部合わせて現在約2000人規模で、様々なバックグラウンドを持った生徒が学んでいます。また、教員も日本全国各地から集まっており、経験と個性が豊かな先輩教員のもとで私の教員生活1年目はスタートしました。本稿では、新型コロナウイルスの影響により世界中が困難な状況の中、在外教育施設で働き始めた私の教員生活を紹介したいと思います。

2. 約7ヶ月間におよんだ在宅学習での日々

2021年4月、私は渡泰しました。その頃、バンコク首都圏中心に新型コロナウイルスの感染第3波が発生していたため、タイ全土で学校閉鎖措置がとられました。この閉鎖措置は4月から10月まで約7ヶ月間の長期におよび、その期間学校ではオンラインを活用した在宅学習が行われました。在宅学習から始まった教員生活ですが、幸いにも出勤形態は7月頃までは在宅勤務と学校出勤が半々だったため、先輩教員と共に授業作りを行うことができました。他の先生がどのような授業をしているのか、どのように教材研究しているのかを在宅学習期間で学ぶことができ、教員1年目で不安

な気持ちも少しずつ軽減されていきました。

在宅学習期間では主に Google Classroom を活用し、生徒への連絡や授業課題の配信を行いました。授業形式は4月から9月までの期間はオンデマンド型の授業、10月からは Google Meet を活用した同時双方向型の授業をしました。

4月からのオンデマンド型の授業では、主に授業動画と Google フォームやスライドを課題として配信しました。課題は学年ごとに一齐に配信するため、英語科では同じ学年を担当している先輩教員の方々と一緒に協力して課題の作成に取り組みました。オンデマンド授業の期間で大変だった3つのことを紹介します。1つ目は、生徒の実態がわからない中で授業を作らなければいけなかったことです。私を含め担当の先輩教員の方々が今年度から来泰したこと、生徒の実態が全く分からない状況の中手探りで授業を作り始めました。生徒が見えない中での授業作りは、経験のない私1人ではとてもハードルが高いものであったと思います。経験豊富な先輩教員の方々と共にできたことはとても有難いことでした。2つ目は、授業動画作成です。私は主に先輩教員の方々が作成した授業スライドをもとに動画の作成・編集を担当しました。動画編集作業は初めてだったので、技術面で苦労しました。しかし、先輩教員の方々の豊富な授業アイデアを動画に落とし込むにはどうしたら良いかを話し合いながら、授業で使えるゲームや練習方法を学ぶことができました。3つ目は、生徒との意思疎通が難しかったことです。オンデマンド型の授業ではリアルタイムで生徒の反応や質問を聞くことができないので、生徒が理解しているのか確認することが難しいです。そのため、メッセージ機能や Google Meet での自習室（質問教室）の開設等を通して意思疎通ができるよう工夫をしました。

10月からの同時双方向型での授業では、登校時と同じようなクラスごとの時間割をもとに、Google Meet を活用したリアルタイム授業を行いました。この期間からやっと担当する生徒たちの反応を見ながら授業をすることができました。顔を見て声を聞きながら授業ができたことは、教員としての第1歩をやっと少し踏み出せたかのような感覚でした。緊張もありましたが、喜びと楽しさの方が大きい初めてのオンライン授業でした。また、この期間からは所属する学年に加えて、他学年への授業も始まりしました。2つの学年をまたぎながらのオンライン授業は授業スケジュールの管理が大変ですが、様々な生徒をみることができるので非常に良い経験だと思っています。

3. ついに学校再開そして分散登校と怒涛の日々

10月下旬からはついに登校が再開されました。まずは、分散登校として開始され、各学年の生徒が2日に1回、午前中のみ登校してくるようになりました。生徒が登校してきた初日は目まぐるしく一瞬で終わってしまう忙しさでした。特に、登下校時が印象強く残っています。登校時はコロナ禍のため、生徒1人1人の健康調査表と ATK (抗原調査) の結果確認及び体温のチェックを行っています。小学生もいるため、約30分かけて次々に来る児童生徒の対応に追われました。また、下校時は約100台以上のスクールバスに児童・生徒が一齐に乗り込みます。学校の敷地内に並べられたスクールバスの数に圧倒されたのと同時に、本当に大規模な学校であることを実感した下校風景でした。

分散登校期間の授業は、主に登校日に授業があれば対面で実施、在宅学習日に授業があれば Google Meet で実施という形式です。対面用と Google Meet 用の2つの形態での授業準備と管理が大変ですが、対面で会うことができるようになってから授業中に生徒の反応が増えたクラスもあり、生徒との関係性が重要であることをより実感しました。

4. おわりに

日本から離れタイで始まった教員生活1年目は、在宅学習期間が半分以上という生活でした。教員としての第一歩を踏み出せていないような状況が長く続きましたが、先輩教員のもとで試行錯誤しながら授業作りができた経験はとても貴重なものでした。これからがやっと私の教員としての始まりです。生徒と対面で授業ができる喜びを胸に、教員としての授業技術力向上に精進したいと思います。

教師になるということ

R. E.

(東京都公立中学校国語科教員)

1 はじめに

私は、2021年3月に法政大学文学部を卒業し、現在は東京都の公立中学校で中学1年生の担任をしています。念願だった教師の職に就くことができた私の、この半年間の経験と、そこで感じてきた思いをお伝えさせていただきます。みなさんにとって、将来の選択のきっかけとなれば嬉しいです。

2 出会いと始まり

大学の卒業式を終えた3月下旬、配属されることになった学校にご挨拶をしに行きました。そこで校長先生から、「1年生の担任をお願いしたい」とお話をいただきました。1年目は副担任だろうと考えていた私は正直非常に驚きました。いきなり担任なんて大丈夫なのだろうかと不安も込み上げてきましたが、それ以上に早速自分のクラスを持てるということに大きな喜びを感じ、生徒に会えることが益々待ち遠しくなったことを覚えています。

入学式の日。途轍もなく緊張しながら教壇に立った時、私に向けられた生徒のキラキラした目は一生忘れることはありません。その時、「私はこの子たちの先生になったのだ」と、実感すると共に、責任の重さを感じました。私は生徒に、「全員が居場所だと思えるクラスを一緒に創ってほしい」と伝えました。

その日から怒涛の日々が始まり、1日1日があつという間に過ぎていきます。全てが初めてで、毎日クラス運営をすることに必死でした。授業はもちろん、給食時や掃除の指導においても、まずは学校のルールを頭に叩き込み、分かりやすく生徒に伝えることに苦労しました。教師には入社時研修はなく、いきなり本番なのだと、思い知らされる毎日でした。

3 1年目で守ると決めていること

私は、未熟ながらも教師1年目でこれだけは徹底すると強く決めていることがあります。

それは、「誰よりも生徒に愛情を注ぐこと」と「何事も一生懸命に取り組む」ということです。経験が足りないのならば、まずは誰よりも生徒に愛情を注いだ1年だったと胸を張れるようになろうと決めました。5月に行われた第1回保護者会でもその決意を保護者にお伝えしました。それが、初担任を持たせていただくことへの誠意だと思います。この半年間、まだまだ足りないところも多々ありますが、私なりに精一杯の愛をもって生徒と接してきたつもりです。「生徒」というくくりとして見るのではなく、一人一人の“人”として向き合い、まずは生徒を知ることから始めました。生徒全員と1日1回は会話するように心掛けたり、回収したプリントや連絡ノートには必ずコメントを書いて返したりと、今の自分ができることを探して取り組みました。また、自己開示をすることで相手に安心感や共感を抱いてもらえると考え、生徒に私自身の話もよくするように心掛けています。その結果、生徒も徐々に心を開き、今ではゲームの話から将来の夢の話まで、毎日色々なことを話してくれるようになりました。生徒との信頼

関係を築くうえでは、自分から関わりに行くことから始まるのだと学びました。

また、「一生懸命に取り組む」というのは、校長先生からいただいたアドバイスです。「失敗してもいい。一生懸命取り組むことが何よりも大切で、その気持ちは必ず生徒や保護者に届くから。」と言う言葉を信じて、この半年間何事にも心を込め、最善を尽くすことを意識して仕事に励んでいます。

4 生徒に寄り添うとは

「生徒に寄り添う」ことが大切だと言われますが、この半年間を通じて、生徒の数だけ寄り添い方も存在すると感じました。悩みを丁寧に聞いてあげることが必要な生徒もいれば、背中を押してあげることが必要な生徒もいます。

私のクラスの生徒の話をしていきます。私のクラスには集団生活の音が苦手で学校に来ることができなくなってしまった生徒がいます。私は最初、その生徒に対してどのような声かけをすれば学校に来られるのだろうかということばかり考えていました。しかし、辛そうに学校に来てはすぐに早退するその子を見ていると、私の寄り添い方は間違っているのだと気付かされました。私は養護教諭やスクールカウンセラーの方、そして保護者と何度も相談しながら、その生徒の未来にとって1番良い選択は何だろうかと考えました。その過程で、学校外の適応指導教室への登校という道を見つけ、提案をしました。今ではその生徒は適応指導教室で勉強をし、週に一度は放課後に学校に登校して、私と面談をしています。今週はこれを学んだ、とか土日は何をして過ごすか、などという話を楽しそうに話してくれるその生徒を見ていると、この形がこの生徒に合った寄り添い方なのかもしれないと思えます。

他にも家族の關係に悩む生徒や、体が弱くクラスに馴染めない生徒などが在籍しています。それぞれの生徒にあった寄り添い方を模索し続けることは教師としての役目です。

5 おわりに

「教師にとって一番大切なものは何か」これは教員採用試験の面接でも聞かれた質問です。教師になった今、改めて答えるならば、体力と愛情だと話します。教師の仕事はとてもハードです。労働時間や生徒のパワーに負けない体力が求められます。そして何より愛情がなければ、「生徒のため」を考えることはできません。1時間の授業をするにしても、そこにどれだけ準備の時間をかけるのか、生徒との接し方にしても、そこにど

れだけ愛情をかけられるのか、全ては自分次第です。私はこの先も試行錯誤しながら、大学生のときに思い描いていた理想の教師像に近づいていると、確信が持てるように努力を重ね、前進し続けると決意しています。ここまでお読みいただき、ありがとうございました。